

スペシャル
365

呼吸が
らくになった!

酸素吸入器が
不要になった!

肺疾患に希望の光!
不治の病と思つていた

黒プラチナで

肺気腫が
改善した!



白川 太郎

如月総健クリニック院長

肺気腫の患者さんを救った 黒フランチナは



母の反対を押し切って
呼吸器の医師になった
私が見た病棟の現実は
希望のない世界でした

いまから約三十年前に医師になつた私は、京都大学附属病院や日本赤十字病院で医師として経験を積んだ後、英国のオックスフォード大学やウェーラーズ大学で講師や助教授を務め、帰国後は京都大学で教授を務めました。その後、大学病院や総合病院の先端医療でも治せない病気があることを知った私は、西洋医学に限界を感じ、みずからクリニックを立ち上げました。

以後の私は、大きな病院で治療を受けても治癒が見込めず、生きる希望を失いかけていた患者さんを救うために、日々の治療にあたっています。手前味噌ではありますが、国内外の大学や総合病院での経験のみならず、開業医としても患者さんを診てゐる私は、どんな医師よりも多くの経験を積んでいると自負しています。

現在は末期がんの患者さんを診ることが多い私ですが、医師としてのキャリアは呼吸器科か

呼吸器治療の常識を 変える可能性を 秘めています

ら始まりました。実は、研修期間を終えて医師としての専門を決めるとき、現在八十七歳になる母は私にこういいました。「呼吸器科の医者にだけはならないでほしい」と。

母の願いの背景には、当時に不治の病といわれた病気の一つに肺結核があつたからです。母は、医師がどんなに手を尽くしても治癒が見込めず、苦しみながら亡くなっていく肺結核の患者さんの治療を息子にさせたくないかったのだと思います。しかししながら、「苦しんでいる患者さんたちを救いたい」と希望に燃えていた私は、母の反対を押し切って呼吸器科の医師になることを決めたのです。

私が配属された呼吸器科の病棟は、医師や看護師から「死の病棟」と呼ばれていました。肺結核にかかる高齢の患者さんは、朝から晩まで苦ししそうな顔で、朝から晩まで苦しむ世界」だったのです。

私が配属された呼吸器科の病棟は、医師や看護師から「死の病棟」と呼ばれていました。肺結核にかかる高齢の患者さんは、朝から晩まで苦しむ世界」だったのです。

ところが、実際に配属された呼吸器科病棟の光景はすさまじいものでした。呼吸器科の病棟をひと言で表現すると「希望のない世界」だったのです。

多くのがん患者さんを診ている私にとって、肺機能の低下をすることもつらい患者さんたちは、苦しさのあまり食事も満足にとれません。どんどんやせ細り、そのまま最期のときを迎えていました。

多くのがん患者さんを診ている私が、呼吸器科の医師として過ごしたときから三十年がたつても、呼吸器の治療に劇的な進歩は見られていません。肺機能が低下、

[しらかわ・たろう] 1955年、大分県生まれ。京都大学医学部卒業、医学博士。京都大学胸部疾患研究所(現・京都大学ウイルス・再生医学研究所)附属病院第一内科、高槻赤十字病院呼吸器科に勤務。大阪大学医学部講師、英國オックスフォード大学医学部講師、英國ウェーラーズ大学医学部助教授、中国第4軍医科技大学附属西京医院呼吸器科客員教授などを経て、2000年から京都大学大学院医学研究科教授。理化学研究所遺伝子多型研究センター(現・生命医科学研究センター)チームリーダーを経て、2006年から臨床研究を重視。ユニバーサルクリニック院長、東京中央メディカルクリニック理事長を経て現職。主な著書に「がんの非常識 がんの正体がわかれば末期がんでも懼れず」(産学社)など。

もしくは消失してしまった患者さんたちは、希望がない日々を過ごしているのです。

肺機能が低下した患者さんが生きる希望を失いがちなのは、患者さんが直面する壮絶な苦しみと恐怖感にあります。

私たち人間にとつて最もつらいのは、痛みではなく、呼吸ができない苦しみです。末期がんの患者さんにとつての痛みは壮絶なものですが、死を意識される「呼吸ができない苦しさ」の怖さは尋常ではありません。私たち、わずか三分間でも呼吸ができないになると死に至ります。生と直結している呼吸ができない患者さんは、すさまじい恐怖感に襲われるのです。

Aさんに黒プラチナの飲用をすすめ、その場で多めに飲んでもらいました。すると驚いたことに、三十分もたたないうちにAさんは全身がシャキッとして、「先生、おなかがすきました。焼肉弁当が食べたい」といったのです。

クリニックに弁当の用意はありませんから、スタッフに焼肉弁当を注文してもらいました。届けられた焼肉弁当をおいしそうにほおばるAさんの姿は、従来の医学の常識では考えられない光景です。Aさんはご飯を少し残したもの、焼肉を完食。自分で車を運転して帰ったAさんの姿を見送りながら、私は黒プラチナの無限の可能性を感じたのです。Aさんの例とほぼ同じ時期に、黒プラチナの可能性をさらに感じ

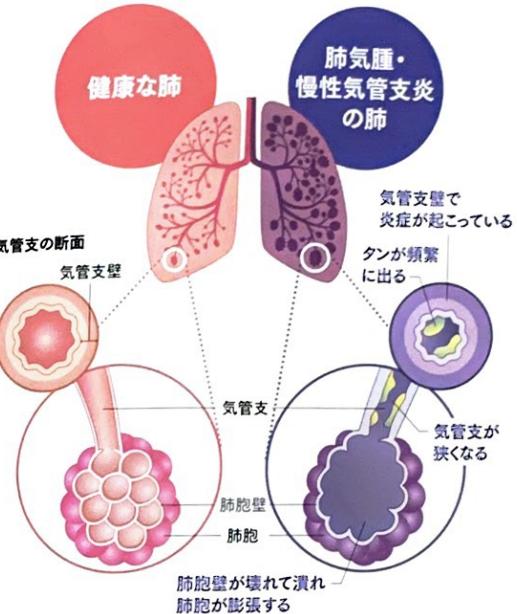
白金(プラチナ)とパラジウムが微粒子化された黒プラチナは黒褐色が特徴の飲料水

失っていくのです。

肺機能が低下している患者さんやご家族にとって、希望の光になると考えているのが、「黒プラチナ」と呼ばれている健康飲料水です。黒プラチナには、金属のプラチナとパラジウムを特殊な技術で微粒子化(ナノ化)して適切な比率で配合した「白金パラジウムナノコロイド」という素材が豊富に含まれています。黒褐色が特徴の白金パラジウムナノコロイドは、抗酸化作用が強力で、体内にある限り、

何度も繰り返し抗酸化作用を發揮することが確かめられています。

肺機能が低下している患者さんの肺は炎症が起っています。炎症が起っている場合には、細胞を傷つける活性酸素が大量に発生するため、肺機能がさらによく低下する悪循環が生まれます。



重度の肺疾患でも 黒プラチナで呼吸が 短時間でらくになり 酸素吸入器を外せた

「生きる望み」に書かれていた、現代医学の常識では理解できない数々の事実を読みながら、がん治療に比重を置いていた私の心中で、「肺の病気に苦しむ患者さんたちを救いたい」という気持ちがよみがえってきました。「黒プラチナは、肺の病気で苦しんでいる患者さんを救えるかもしれない」「もしかしたら、黒プラチナは、呼吸器の医療を変える存在になるかもしれない」と、半ば諦めかけていた気持ちに、再び光が灯りはじめたのです。

そこで私は、肺機能が低下している重度の呼吸器疾患の患者さんたちが、肺機能が低下した患者さんが希望を持てないのは、治療を受けても治癒する見込みがないからです。もし、黒プラチナで肺機能の維持や改善が見込めるところ、「医師として事実かどうかを確認するべきではないか」、さらにそれが真実だったならば「苦しんでいる患者さんたちのために、黒プラチナの存在をもっと広めるべきではないか」と思いました。

私の患者さんの中でも、厚生労働省に認められていることや、優れた研究成果の豊富さ、長年にわたって医療の現場で活用されている事実から試してみようと思ったのです。

私が黒プラチナを飲んでもらったのは、いまから約十年前のことです。ある治療家にすめられたことがきっかけでした。初めて黒プラチナを見たときは、金属を患者さんの体に入れていいものかと不安を覚えたのですが、食品添加物として厚生労働省に認められていることや、優れた研究成果から試してみようと思ったのです。

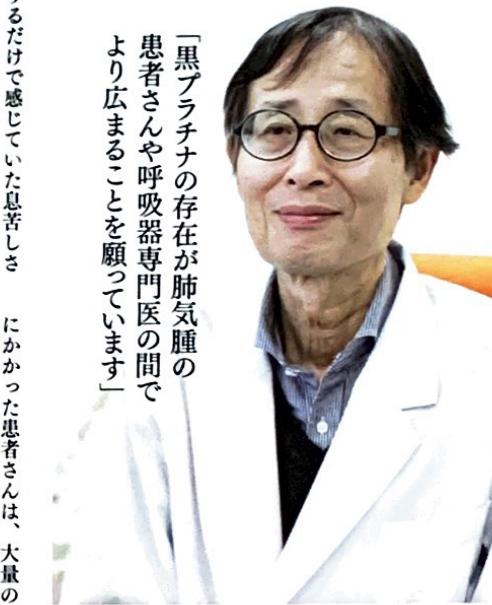
私の患者さんの中でも初めて黒プラチナを飲んでもらったのは、胃がんを患っていたAさん(男性)でした。Aさんは、進行が早い難治のスキルス性胃がんと診断され、大学病院から手の施しようがないほど衰弱し、ご家族に抱えられながら来院しました。私は

立てないほど衰弱した患者さんが黒プラチナを試したら焼肉弁当をモリモリ食べて驚いた

ます。 ままだ状態です。膨らんだ肺胞を
しませることができなくなる
ため、肺気腫の患者さんは、吸
入よりも吐くことが難しくなり

B
さ

「黒アラチナの存在が肺気腫の患者さんや呼吸器専門医の間でより広まることを願っています」



四まで下がり、タンやセキも出なくなりました。

口さんとのさんの病例に時
吸器科の医師にとって信じがた
い話かもしれません。しかしな
がら、お二人の例は、私がこの
目で確認した、まぎれもない事
実です。

肺疾患の患者さんにとつて症状が改善しているかどうかは、血液検査の数値よりも、「呼吸がらくになつた」という体感で分かります。肺疾患やがんなど、難治の疾患にかかっている患者さんの場合、最初の数日は黒アラチナを多めに飲んでほしいと伝えています。その後、呼吸がらくになるなど、なんらかの体感が得られたら、徐々に飲む量

全国をくまなく回り、
生きる希望を失った
難治の患者さんの
診察を続けています

私は現在、福岡県にある如月
総健クリニックという医療機関
で診察をしながら、全国を飛び
回って末期がんの患者さんの訪
問診療を続けています。北海道

から沖縄まで、一人の患者さんを診るために現地に足を運ぶのは大変ですが、重篤な患者さんは来院していただくなことはできません。さらに、患者さんのものとを直接訪れることで、ふだん過ごされている生活環境やご家族との人間関係を確認することができます。その中から、がんの原因や悪化させている情報が得られることがあるのです。

私が訪問診療をするさいに重視していることは、患者さんやご家族と波長を合わせることです。「病気と闘い抜く気持ちを共有する」といい換えてもいいでしょう。肺疾患やがんなど、

The diagram illustrates two lungs. The left lung is labeled '健康な気管支' (Healthy bronchi) and shows normal, branching bronchial structures. The right lung is labeled '気管支拡張症' (Bronchitis) and shows thickened, non-branching bronchial walls. Below the lungs, a caption reads: '気管支壁が壊れて細菌が肺の中に入り込んで増殖、肺全体で炎症が起こるようになる' (The bronchial wall is damaged, allowing bacteria to enter the lung and multiply, leading to inflammation throughout the lung).

難治と呼ばれる病気の治療は容易ではありません。私は患者さんやご家族に対して「ともに病気と闘う姿勢」を望み、共有していくただくことをお願いしています。

地点に立てると考えています。

①「生きたい」という気持ちを
強く持つこと

②ご家族や友人など周囲の人たちによる支援の輪があること

③ご家族と医療スタッフとの間に信頼関係があること

末期の状態まで進行した患者さんは時間はありません。患者さんの命を預かる身である私たちは、患者さんから「この医師に懸けてみよう」と思ってもらいたいのです。これら三つの条件は、患者さんとの波長を合わせるうえで欠かせないものと考えています。

全国各地を訪問診療で飛び回っている私ですが、必ず時間を割いていることがあります。患者さんにとって救世主となる可能性を秘めた、新しい健康食品の調査や研究です。西洋医学に基づいた治療に限界を感じ、みずからクリニックを立ち上げた私は、実績のある優れた健康食品を活用することで、治療成果を上げてきました。患者さんを救える可能性を感じた健康食品を比較検討し、結果によっては入れ替えることで患者さんを救う可能性を高めています。

世の中に健康食品は数え切れないので存在します。患者さん

難治疾患の克服には
患者・家族・医師の間で
「絶対に生きる」という
気持ちの共有が不可欠

黒プラチナは老化や病気を招く 世界唯一の物質と判明

川上智史 東海大学医学部基礎医学系生体構造機能学領域客員准教授

活性酸素が増えると
細胞レベルで慢性的な
炎症反応を引き起こし
臓器・器官の機能が低下

六二一六七八の記事で白川太郎先生（如月總健クリニック院長）が解説されたように、現代の医学でも治療が難しい病気の一つに肺気腫が挙げられます。一般社団法人日本呼吸器学会によつて、現在は肺気腫と慢性気管支炎、気管支拡張症などによって慢性肺疾患（COPD）と呼んでいます。肺気腫や慢性気管支炎、セキやタム、呼吸困難などの症状が進行した患者さんは、生活の質が著しく低下します。

白川先生の患者さんたちが、黒プラチナによって肺機能が向上した理由の一つとして、強力

な活性酸素除去作用が挙げられます。私たちが毎日、あたりまえのように取り入れている酸素は、全身に存在する数十兆個の細胞を活動させるために欠かせない存在です。呼吸によって取り入れた酸素は、血液中の赤血球によって全身の細胞に運ばれ

ます。体内に取り入れられた酸素のうち、約二～三%が活性酸素になるといわれています。活性酸素は、細菌やウイルスを強力な酸化力で撃退してくれる、私たちの体に欠かせない存在といえます。

ところが、活性酸素が体の中

プラチナとパラジウムの組み合わせで 抗酸化力が安定する



貴金属として知られるプラチナ(白金)をパラジウムと組み合わせることによって、抗酸化力を安定して発揮させることができます(写真は電子顕微鏡で見たプラチナとパラジウム)

で過剰に増えると、外敵だけでなく正常な細胞も攻撃し、細胞レベルで炎症を引き起します。活性酸素によって炎症が起ることでさまざまな病気の原因になることが、近年の研究によつて確かめられています。私たちの体では、過剰になつた活性酸素を除去するために、自分の酵素を作られています。しかししながら、加齢や生活習慣の乱れによって活性酸素を除去する力が低下すると、体の活性酸素が増加して正常な細胞まで傷つけられてしまうのです。ひと口に活性酸素といつても、構造の違いによって、次の四種類が存在します。

● スーパーオキシド（体内で最も多く発生し、細胞の損傷を促す。他の活性酸素を発生させる前駆体物質である）

● ヒドロキシルラジカル（最も強い毒性を持つ。さまざま病気の発症に関係する）

抗酸化物質	活性酸素の種類			
	スーパー オキシド	ヒドロキシル ラジカル	過酸化水素	一重項酸素
スーパーオキシドディスクターゼ	○	×	×	×
グルタチオンペルオキシダーゼ	×	×	○	×
カタラーゼ	×	×	○	×
アスコルビン酸(ビタミンC)	○	×	○	○
αトコフェロール(ビタミンE)	×	○	×	○
βカロテン	×	○	×	○
フラボノイド	×	○	×	×
リポフラビン(ビタミンB ₂)	×	×	×	○
ポリフェノール	×	○	×	×
カテキン	×	○	×	×
黒プラチナ	○	○	○	○

4種類ある活性酸素を除去するには複数の抗酸化物質をとる必要がある。黒プラチナをとると、4種類の活性酸素の害から体を守ることが期待できる

出典：東海大学医学部「白金パラジウムナノコロイドによる4種活性酸素除去能の検討」より作成

シードディスクターゼ)やグルタチオンペルオキシダーゼ、カタラーゼという酵素によって除去されています。植物性色素のポリフェノールなどが挙げられます。しかしながら、抗酸化物質の多くは、先に挙げた4種類の活性酸素のうち、

黒プラチナには、ナノ化(一ナノは一〇〇万分の一)した白金(プラチナ)とパラジウムをコロイド状(微粒化した物質が均一に分散している状態)にした、白金パラジウムナノコロイドと呼ばれる物質が含まれています。パラジウムにはプラチナが持つ抗酸化作用を安定させる働きがあります。さらに、適切な比率で配合すると、抗酸化力が最も安定することが確かめられています。黄金比といえるこの比率は、黄熱病の研究で日本の医学史に名を残している野口英世博士によって考案されています。黒プラチナが持つ抗酸化力はとても強く、抗酸化力の強い素材として知られるビタミンCの一〇〇～五〇〇倍もあること

が分かっています。さらに、ビ

かわかみ・さとし
北里大学卒業後、同大学大
学院医療系研究科修了。医
学博士。専門は予防医学。
在、東海大学医学部基礎医学系生体構
造機能学領域客員准教授、日本口腔機能水
学会理事を務める。医学的な視点で美と健
康を分かりやすく解説するメディカルアドバイ
ザーとしても活躍。著書に「あのころの自分
に戻れたら」を叶える血流改善マッサージ」
(主婦の友社)がある。

黒プラチナには、ナノ化(一
ナノは一〇〇万分の一)した白金(プラチナ)
とパラジウムをコロイド状(微粒化した物質
が均一に分散している状態)にした、白金パラ
ジウムナノコロイドと呼ばれる物質が含ま
れています。パラジウムにはプラチナが持つ
抗酸化作用を安定させる働きがあります。
さらに、適切な比率で配合すると、抗酸化力
が最も安定することが確かめられています。
黄金比といえるこの比率は、黄熱病の研究で
日本の医学史に名を残している野口英世博
士によって考案されています。黒プラチナが持つ
抗酸化力はとても強く、抗酸化力の強い素
材として知られるビタミンCの

一一部しか除去できません。除去できなかつた活性酸素はそのまま体内に残るため、細胞の炎症を促進させてしまうのです。

● 黒プラチナは
四種類ある活性酸素を
除去し、繰り返し
抗酸化作用が続く

黒プラチナには、ナノ化(一ナノは一〇〇万分の一)した白金(プラチナ)とパラジウムをコロイド状(微粒化した物質が均一に分散している状態)にした、白金パラジウムナノコロイドと呼ばれる物質が含まれています。パラジウムにはプラチナが持つ抗酸化作用を安定させる働きがあります。さらに、適切な比率で配合すると、抗酸化力が最も安定することが確かめられています。黄金比といえるこの比率は、黄熱病の研究で日本の医学史に名を残している野口英世博士によって考案されています。黒プラチナが持つ抗酸化力はとても強く、抗酸化力の強い素材として知られるビタミンCの

一〇〇～五〇〇倍もあること

が分かっています。さらに、ビ

タミンCやEが一度反応すると抗酸化作用を失つてしまふのに対し、黒プラチナの抗酸化作用は体内にある限り、何度も繰り返し作用します。白金が抗酸化作用を發揮した後にパラジウムが酸化された白金を還元させるため、活性酸素を除去した後も抗酸化作用が続くのです。

特筆したいのは、黒プラチナが、四種類ある活性酸素のすべてを除去できることです。東海大学医学部の研究によつて、四種類ある有害な活性酸素を単独で除去できる世界唯一の物質であることが確かめられました。黒プラチナは、約二十四時間、体内にとどまって強力な抗酸化作用を発揮した後、体内に排出される安全性の高い物質であることも分かっています。

“黒プラチナの奇跡”を見た家族が告白！

酸素吸入器を外せた父は 穏やかな晩年を過ごせました

荒井 晴央さん



帝国海軍で体操教官を務めた屈強な父が
五十代で肺気腫を発症

黒プラチナが發揮する強力な抗酸化作用は、難治といわれる疾患に対して優れた働きかけることがあります。今回ほど本人や家族が治癒を諦めていた末期の肺気腫が劇的に改善した荒井保さんの様子を、息子の晴央さんに語っていただきました。

私は三人兄弟の末っ子です。

兄弟の誰かが悪いことをしたときは、軍隊式の連帯責任を取られました。兄から順番に父のゲンコツを食らいましたが、要領がよかつた私は、自分の番が来るまでにうまく逃げてきました。厳格な父親に対して、母親はいつも包み込むような優しさで、私たち兄弟を守ってくれました。

敗戦後、戦地を離れた父は、家族が待つ郷里の群馬県に帰ってきました。屈強な体と抜群の運動神経の持ち主だった父の体に異変が起つたのは、五十歳を過ぎた頃でした。当初は喘息と診断され、その後、セキが止まらなくなつたんです。病院を何ヵ所も回つて診察を受けても病名は変わらず、処方された薬を飲んでもセキは止まりませんでした。父の病名が肺気腫と分かったのは、異変から十年近くたつた六十歳前のことでした。その頃には父の肺はかなり悪化して、酸素吸入器が欠かせなくなつていました。

病院からの緊急電話で「覚悟を決めてほしい」といわれました

いましたが、帰るたびに父が飲んでいる薬の量が増えていることに驚かされました。最初は小さなカゴだった薬の置き場が、帰省のたびに大きい箱になりました。中にはたくさんの薬が入っていました。当時の私はいつも、「こんなにたくさん薬を飲んでるのに、父のセキはどうして治まらないんだろう」と不思議に思っていました。

軍隊で屈強な体操指導教官を務め、病気知らずで生きてきた父は、肺気腫と診断されて大きなショックを受けしていました。父は自営で仕事をしていましたが、五十五歳のときに次男に仕事を繼がせて悠々自適の生活を送るつもりだったようです。治療を受けても肺気腫が改善しない日々に「こんなはずじゃなかった」と、母によくこぼしていました。

父が毎日二十四時間襲われていました。同時に、息子として父の力になれない自分に腹立たしさを感じていました。

父が毎日二十四時間襲われていた、呼吸ができないからは、想像を絶する苦しさだったと思います。父によると、酸素吸入器を使つても呼吸が苦しく、深呼吸するのもつらいといつていました。父は胸の痛みが取れないと、常に悩まされました。

主治医の先生から、「お父さんは非常に危険な状態です。気管に穴を開けて直接肺に酸素を送る緊急処置しかできません。治療は尽くしました。覚悟を決めてください」といわれました。

集中治療室にいた父は、ベッドの上で何本もの管につながれ

高校卒業後に上京した私は、ときどき群馬の実家に帰省して、父の病名が肺気腫と分かったのは、異変から十年近くたつた六十歳前のことでした。その頃には父の肺はかなり悪化して、酸素吸入器が欠かせなくなつていました。

父がなぜ肺気腫になつたのか、その理由は分かりません。薬の種類を替えてもセキが止まらず、

酸素吸入器を外せた父は、しかし歩くだけで呼吸が苦しくなっていた父は、自宅に設置した酸素吸入器の横に座り、チューブを鼻に着けて過ごしていました。あらゆる治療を受けても肺気腫が悪化していく父は、し

かず、徐々に小さくなり、家の中を歩くだけで呼吸が苦しくなった。私が心配で、毎日自暴自棄になつてしまっていました。でも、父はいつまでも元気でいてくれました。父の元気な姿を見て、私は少しでも安心することができました。

私は父の元気な姿を見て、

した。「もう好きなことをさせてもらう！」といつても、外出することはできません。希望が見えなくなつた父は、母に対してもいらだちをぶつけるようになりました。父は年に二~三回、呼吸困難を起こして救急車で病院に運ばれていました。父が入院したことを母からの電話で知るたびに、私の気持ちは重くなりました。一九九七年、姪の結婚式に参列するため群馬の実家に帰つたときのことです。父が入院していた病院から、「お父さんの状態が危ないので家族全員で来てください」と電話がかかってきました。たまたま電話を取つた私は驚いていました。私が驚いていると、母は私に「今回の入院が最後だと思って覚悟している」といいました。

急いで病院に駆けつけると、主治医の先生から、「お父さん

た父は暑れて点滴用の台を倒し、周囲が血だらけになっていました。

「これはもうだめだ」私を含む兄弟全員がそう思いました。その横で母は、「お父さん！ 子どもたちが来たよ。がんばって！」と何度もいいながら、父の体を必死にさすっていました。

黒プラチナを飲んだら 一週間で呼吸がらくに なり胸の痛みも改善

生と死の間をさまよう父の姿を見ながら、家族全員が絶望的な気持ちになっているときに出合ったのが黒プラチナです。当時の私は医学的な知識をほとんど持っていましたが、「黒プラチナには万病のもとになる活性酸素を除去する優れた作用があり、自然治癒力を高める期待ができる」という知人の話が新鮮な響きとして脳裏に焼きつきました。幸いにも、父は緊急処置として着けた酸素吸入管を外させていたので、黒プラチナを飲ませてみることにしたのです。

黒プラチナを飲んだからといふて、末期の肺気腫が治るとはあり得ないとも思いましたが、黒プラチナを飲んでみよう」と、そこで、母に黒プラチナをすすめてみると、翌朝、母は「ぐつぐつ眠れたよ。こんなによく眠れたのは久しぶりだ」と驚いていました。糖尿病を患っていた母はインスリン注射を打つていましたが、黒プラチナで血糖値が改善してインスリン注射が必要になつたんです。高血圧の治療で服用していた降圧剤もいらなくなつたと喜ぶ母の話を聞きながら、「もしかしたら、黒プラチナは父にも何かもたらしてくれるかもしれない」と思いました。

父が黒プラチナを飲みはじめた一週間もたつていないとき、母から「お父さんの具合がよくなってきたよ！ 呼吸がらくになりましたが、母親が見た劇的な変化は、主治医の先生や看護師さんもとまどいを見せるほどだったそうです。特に、夜の就寝中に父が寝返りを打つて酸素吸入器のチューブが外れても、苦しまずには寝つけました。集中治療室でもがき苦しめた主治医の先生は「荒井さんの体に何かが起つてい

る！」と声を上げたそうです。黒プラチナを飲みつけた父の回復ぶりは劇的で、食欲もみるみる回復していきました。そしてついに、流動食ではなく普通の回復ぶりは劇的で、食欲もみるみる回復していきました。さらに驚いたのは、寝つきが原因でできていた一五歩ほどの褥瘡（床ずれ）が小さくなり、

うな瞬間でした。主治医の先生から退院を告げられたものの、長い寝つき生活で筋力が落ちていた父は、自力で歩くことができませんでした。勢い余ってベッドから落ち、足を捻挫した父の退院は半年後になりました。呼吸そのものはらくになつてていたので、退院し

下から新しい皮膚が現れていたことです。

父が入院していた病棟には、父と同じ肺気腫を患つて入院している患者さんがおおぜいいました。どの患者さんも徐々に症状が悪化し、呼吸困難に陥っています。父と同様肺気腫に改善が見られたのです。父の劇的な回復ぶりは、『病院設立以来の奇跡』といわれ、医師の間で大騒ぎになりました。

黒プラチナの目安量は、1日6ミリ。最初は多めに飲むといい



「黒プラチナのおかげで過ごすことができました」

たときの父は、黒プラチナの量を一日六ヶ所に減らして飲んでいました。

「ありがとう」と書かれた父の日記を読んで涙が止まりませんでした

自宅に戻った父は、酸素吸入器を使わずに過ごしながら、母と毎月、温泉やドライブを楽しむようになりました。

行の報告を聞くたびに、私たち兄弟は驚き、喜び合いました。七十七歳で迎えた正月、お酒も飲めるようになつて、いた父は、こたつで寝込んでしまいました。そのさいにカゼを引いてしまった父は、肺炎を起こしてあっけなく亡くなりました。

後日、父の遺品を整理しているとき、広告チラシの裏に書かれた父の筆跡を見つけました。チラシの裏にびっしりと書かれた父の日記には、自身の体調の変化に驚く様子や、私たち家族への想いが詳細につづられています。父が書いた日記の一部をそのまま紹介します。

この日記を読んだとき、私は涙が止まりませんでした。父が必死に書き留めた家族への想いを残しておきたいと思った私は、父の日記を一冊の本にまとめることにしたのです。

父と母は、当時としては珍しい恋愛結婚でした。中島飛行機（富士重工業の前身。戦前における東洋最大の航空機メーカー）での勤労奉仕中に出会つたそうです。結婚生活を競争と肺気腫に奪われてしまつた父と母は、父が亡くなるまでの二年間、かつての闘病生活がうそだったかのようになります。父の回復ぶりを知つた他の肺

の患者さんは、黒プラチナを飲み、続々と改善が見られたのです。病気に悩んでいる患者さんやご家族に、黒プラチナの存在が届くことを願っています。

そして、父が最期のときと覚悟を決めた最後の日記には、二度と戻ることのない人生を振り返りながら、長年連れ添つた母への感謝の気持ちがあふっていました。

初出:「健康365」2019年6月号掲載 ©エイチアンドアイ